連載

実験的教育論［8］

ベーシク・トラストを喪失した現代人

広島大学大学院教授　町田宗鳳（まちだそうほう）

「ベーシク・トラスト」とは何か

アメリカの精神分析家エリク・エリクソン（一九〇二～一九九四）が、人間の心理社会的発達段階を八つに分けるライフ・サイクル説を唱えたことは、よく知られている。その中でも注目されるのは、初期の発達段階におけるベーシク・トラスト（basic trust: 基本的信頼）という考え方である。

その段階において、主たる養育者から肯定的な養育行動を受ければ、対人関係において基本的な安心感が生まれ、他者に対してだけではなく、自分自身に対する信頼能力を培うことができるとされている。

ベーシク・トラストは、赤ちゃんがお母さんに抱かれ、その乳房にすがりついているときの安心感がその基本となるが、慈愛をもって養育してくれる人物がいれば、立派に親の代わりとなりえる。ところが、ベーシク・トラストを持たないまま肉体年齢を重ね、大人の仲間入りをしてしまえば、いわゆるアダルト・チルドレンとなっていく。ましてや現代社会のように子どもから大人への区切りとなるイニシエーション（通過儀礼）を喪

失してしまった社会環境の中では、自己を意識化する機会をもたないままのアダルト・チルドレンが氾濫することになる。

このベーシク・トラストというものが欠如していれば、社会的にどれだけ成功を収めていようが、人間として基本的な充足感を持ち得ない。他者の眼から見れば、羨望の的となるような人物であっても、幸福とはほど遠く、虚無感に悩まされる場合が多いのは、そのせいである。ときどき有名人が突如として自殺し、「なぜあの人が……」と驚かされることがあるが、それはベーシク・トラストの壊れた人間がいかに生き甲斐を持ち難いかということを如実に示している。

伝統的な家族制度が壊れ、少人数の核家族では、その中で自然発生するコミュニケーションにも限度がある。とくに出生率が落ち込む一方の日本では、互いにじゃれあうきょうだいを持つことすら贅沢なこととなりつつある。そして両親が共働きで、家庭にいる時間が少なく、いわゆるスキンシップがほとんどないとなれば、幼い子どもがベーシク・トラストを獲得するというのは、まず望み得ないことだ。

ちなみにスキンシップというのは、和製英語であり、英語のネイティブに使っても怪訝な顔をされるだけで、通じることはない。しかし、私はこの言葉が気に入っているので、わざと外国人にも使って、「日本はトヨタやソニーだけでなく、こういう素晴らしいメイド・イン・ジャパン英語をどんどん輸出すべきだ」とジョークを飛ばしている。

ところで、幼い子が育つ家庭において、その両親が不和であるとすれば、そのコミュニケーションはボリューム的にも乏しいものになるだけでなく、極端に敵愾心に満ちたものとなる。そんな家庭環境の中では、子どもたちの深層意識で深刻な不安感が煽られることになる。

先進国では離婚が増加の一途をたどっているが、離婚が必ずしも悪であるわけではないにしても、そのインパクトは子どもたちにフルに襲いかかっていることだけは、確かである。アメリカは離婚大国であるが、それがゆえに幼少期にトラウマを受け、長じてもアダルト・チルドレンとなって、さまざまな精神病理を見せている人間が少なくない。

経済至上主義に突っ走る中国でも、一人っ子政策に加えて、離婚が急増しているから、そのような環境で育った子どもたちが社会成員として機能せざるを得ない年齢

に達したとき、深刻な問題に直面せざるを得ないだろう。

つまり日本のみならず、先進国では大なり小なり、ベーシク・トラストを喪失した人間がひしめき合っていると考えてよい。そのために根源的な不安を抱えた人間が、うつ病から統合失調症まで、さまざまな精神疾患にかかっている。

日本は今年で連続八年、自殺者が三万人以上という悲しい記録を更新しつつあるが、それも単にリストラや倒産といった現実的問題が真の原因となっているのではなくて、困難に直面したときの動揺からの復元力を持たない魂があまりにも多いことを示している。

たとえば小さなヨットが太平洋を横断するとなれば、必ずや何度かの大嵐に遭遇し、転覆することもあるだろうが、それが沈まないのは、船底に突き出ているセンターボードに復元力があるからである。つまり、ベーシク・トラストとは人間の魂に与えられた精神的センターボードのことなのである。

今、全国の学校で問題となっている多動傾向のある子にしても、脳神経学的な疾患という見方がある一方で、何らかの理由でベーシク・トラストを欠いた子どもたちが、意識化されない不安感を行動で訴えていると考えられないこともない。とすれば、そのような子どもたちの行動を矯正するのではなく、彼らが意識化できないでいる不安な気持ちをまず共感することが、解決の糸口になるのかもしれない。

もはや学校も安心できる場所ではなくなった

昨今は大阪の付属池田小学校事件に象徴されるように、何の不安もなく学び、遊べる空間であったはずの学校ですら、子どもたちの恐怖心を煽る場所と化している。校門は厳重に封鎖され、構内が顔なじみの用務員ではなく、外部の警備会社の職員によって監視されるようになった。

そしてまた、その学校への登下校の道筋も、限りなき危険が潜む場所として、子どもたちは身構えて行動しなくてはならなくなった。どこから変質者が狙い定めているかわからず、少しでも油断すれば、取り返しのつかない事態を招くことになる、と親からも教師からも懇々と言い聞かされている。

一昔前なら登下校というのは、女の子は歌を歌いなが

ら道端の草花を摘んだり、男の子は服を汚しながら川を飛び越えたりして、幼い魂が親と教師の目の届かない場所で、思い切り羽を伸ばす貴重な時間であった。それが完全に剝奪されたわけである。

私も最近、東京から東広島に移り住んで、そののどかな環境を楽しんでいるが、毎朝散歩に出てみると、早朝からお母さんたちが団地の前に集まり、子どもたちを並ばせ、当番で学校まで付き添っているのを眼にする。主婦として家事に追われる時間帯に大変なことだと思うが、そのような管理された登下校を毎日経験しなくてはならない子どもたちもまた気の毒である。

そのようなとき、「おはよう」と声をかけても返事をしない子どもが増えたような気がするが、あれはきっと親から、見ず知らずの人から声をかけられても相手にしてはならないと、言い聞かされているにちがいない。

秋田県藤里町でも小学生の幼い命が奪われたが、藤里町といえば、白神山地の入り口に位置する日本でも最ものどかな市町村の一つであり、私も何度か足を運んだことがある。そのような場所でも凶悪犯罪が起きるわけだから、そんな社会風潮の中で、子どもたちのベーシク・トラストはますます希薄化していくことになる。

ここまで子どもたちのことばかり書いたが、その子どもたちを教育する親も教師も、じつは魂が未熟なアダルト・チルドレンであるケースが多い。この連載の中で、「マジメな先生がマジメな教科書をマジメに教えることは、百害あって一利なし」と書いたことがあるが、そのマジメさが、自己への信頼感に裏打ちされない表面的なものとすれば、事態はよけいに深刻である。その偽善性こそが子どもたちの動物的感覚によって嗅ぎ取られるのであって、そのウソ臭さに馴らされてしまった若い魂が受けるダメージは、生涯にわたって影響を及ぼすだろう。

エリクソンのベーシク・トラストという概念は、仏教でいう安心立命のことと理解してよいが、それが壊れていても何らかの宗教的修練によって回復されることもある。しかし、そのような実効性を維持している宗教的伝統は稀有であり、今さら仏門を潜ったところで、安心立命が獲得されるわけではない。

もはや社会全体が、復元力を保証するセンターボードを喪失したまま、漂流しているヨットのようなものである。アダルト・チルドレンがアダルト・チルドレンを生み出すという悪循環が存在し、底なき不安感が社会の

隅々にまで蔓延しているわけだから、由々しきことと言わざるを得ない。

真の〈ゆとり〉教育とは何か

戦後の詰め込み教育は良くなかった。だからカリキュラムをもっと緩やかなものにして、子どもたちに余裕をもって学習させようという〈ゆとり〉教育が唱導されたことがある。ところが、国際的に日本の就学児童の学力低下が明らかになると、たちまち批判に晒され、文科省も方向転換を余儀なくされている。

これからの日本を背負う若者が、国際水準と比べても見劣りのしない基礎学力を有していることは望ましいことであるが、どれだけ学力が向上したところで、魂が病んでいては何の役にも立たない。知識のピラミッドは高ければ高いほど、必ずや人間性という揺るぎのない基礎に支えられていなくてはならない。いまや家庭でも学校でも、不安感を煽られている子どもたちには、別な意味での〈ゆとり〉教育が必要とされているのである。精神が安定すれば、必ず学力は伸びる。

ところで、お隣の韓国では、生徒に三食ぶんの弁当を持参させ、早朝から深夜まで受験学習させている学校が少なくないと聞くが、そのような異常ともいえる詰め込み教育の歪みは、早晩、社会現象となって現れるだろう。

ではベーシク・トラストを取り戻すためには、具体的にどのような〈ゆとり〉教育が可能なのだろうか。このことも、じつは現場の教壇に立っておられる先生方のほうが、現実に即したアイデアが浮かぶと思われるのだが、そのきっかけ作りとして、私なりに三つほどのアイデアを提案してみたい。

一つ目が、自己と環境の関係を安定させる意味での校舎の掃除である。掃除当番だから嫌々するというのではなく、全校生徒と全教師が率先して掃除するような雰囲気作りをしなくてはならない。その掃除には、もちろんトイレ掃除も含まれている。自分たちの手でピカピカに磨き上げた校舎で学ぶのと、放課後にやってきた業者が知らない間にゴミの後始末をしてくれた校舎で学ぶのと、その心理的な差は歴然としている。

一流のスポーツマンとかアーチストには、宿泊先のホテルを出るときも、きちんと片付けて出る人が少なくないと聞いたことがあるが、才能を最大限に発揮するすべ

を知る人間は身の回りを整理整頓することの大切さを直感的に会得しているのだろう。

二つ目のアイデアは、日常生活の楽しさを意識化させるために、家庭科の時間をもっと重視することである。私自身が学校で家庭科を楽しんだという記憶はまったくないが、それは私が呆れるほど不器用であったという理由だけでなく、その授業の位置づけが曖昧だったからである。勉強熱心な学校ほど、算数や理科や国語は大切だけども、家庭科や体育は付け足しという印象がある。

そうではなくて、もっと家庭科に中心的役割を与えて、それを子どもたちが楽しみにするぐらいでなければならない。本来は、家庭教育がその役割を背負うべきなのだが、前述のように問題を抱えている家庭が多いので、現状ではどうしても学校教育がそれを補う必要があるのではなかろうか。

それには先生が管理する局面をできるだけ減らし、子どもたちの主体性を尊重しながら、料理、裁縫、工作を楽しむことを覚えさせたなら、彼らの中の抑圧された感情が解放されるまたとないチャンスとなりえる。

家庭科の中には、草花や野菜の栽培も含まれているのがよい。自分たちが植えつけた植物がスクスクと育つのを肌で感じさせるのである。多くの学校で小動物を飼い、飼育部の生徒が世話をしていると思うが、それも家庭科の一環として取り組むべきだろう。家庭科はその内容次第で、下手な道徳の授業よりも、よほど倫理観を養う貴重な時間となり得る。

三つ目は、自己の内面世界を掘り下げる目的で、じっくりと物語を読ませることである。現代国語の入試に役立つからではなくて、魂に染み込んでいくような読み方があるはずである。それも物語を断片的に読ませるのではなく、最後まで読みきり、できれば繰り返し読むのがよい。そうすれば、そのストーリーは彼らの脳みその芯のほうに刷り込まれて、年老いても忘れないだろう。

ただ、このような〈ゆとり〉教育は、先生が子どもたちに一方的に押し付けるのではなく、先生が全身で飛び込んでいって、みずからもまた癒される教育になっていないかぎり、成功しない。人間として最も根源的な感情としてのベーシク・トラストを取り戻す喜びは、年齢がどれだけかけ離れていても教師と生徒の間に共感し得るものであり、そこにこそ真の〈ゆとり〉教育の姿があるのではなかろうか。